人文学報 No. 520-2（社会人類学教室 17）
東京都立大学人文科学研究科、2024. 3

それでも書く、そして笑う
――内藤順子『取るに足らないものたちの民族誌　チリにおける開発支援をめぐる人類学』を通じて――

田沼　幸子

Ⅰ　内藤さんとあのころ

本論は、内藤順子『取るに足らないものたちの民族誌――チリにおける開発支援をめぐる人類学』の合評会[1]の内容に加筆修正したものである。

内藤さんとは大学院生だった頃、同じく「授業料を払わないゼミ生」として成城大学の小田亮ゼミに出入りして親交を深めた（詳しくは田沼 2020）。上記の合評会の後、豪快に笑う植村清加さんの横で、真顔で筆者を「はむかえない先輩」「クダ巻いてました」と同僚の箕曲在弘さんに紹介した。そんな私にコメントを依頼する内藤さんもおかしな人である。

学会よろしくレジュメを30部用意して行ったが、月曜の夜に対面で参加できたのは10名程度だった。そこで残部を同僚に配ったところ隣の部屋の石田さんに「これ書かないんですか？」と言ってもらえた。そういえば今回話したことは授業で伝えてきたことが含まれているけどどこにも書いてないな、と思い、執筆の許可を伺ったところ、内藤さんからも箕曲さんからもご快諾いただいた。

小田ゼミで会う前に、内藤さんの学会発表を何処かで見たことがある。その時の発表は、確か、日々の予定も明確でなく、先行きもわからないまま過ごす貧困層の人々についての詳細な発表だった。そこまでは普通である。しかし内藤さんは最後に、「でもこれ、大学院生である私も同じですよね」というようなことを真顔で付け加えた。

会場は沸いた。

私は「それ、ここで言っちゃうんだ」と衝撃を受けた。大学院生の先行きが不透明かつ生活も不規則になりがち、というのは、大学では公然の秘密だが、学会は一応、研究業績を見せる場であり、アメリカ人類学会（AAA）に至っては就職活動を兼ねた「奴隷市場」、という自虐ネタが聞かれるほどであった。

そもそも、私と内藤さんが大学院生になった1996年[2]は、バブル崩壊直後であり、「団塊ジュニア」である人口の多い私たちが、「受験戦争」と呼ばれるほど厳しい大学入学をやっと勝ち取ったにも関わらず、四年制大学を卒業[3]するときに「就職氷河期」

が重なった。この若年労働市場の縮小に合わせて、大学院重点化が始まり、それまでは研究者を志し、その資格があると見込まれた本当に一部の者だけに情報が伝わってきた大学院進学という選択が、突如、多くの人に知られることとなった。こうして一般企業に就職できない・したくない人の受け皿となった大学院を後に「フリーター生産工場」と名づける本まで出版される。しかしそうなる以前の大学院では、人類学においては修士号取得後、奨学金や助成金で2年ほどフィールドワークを行い、論文を1、2本書き、先輩や教員の紹介で非常勤講師として大学の授業の経験を積んだ後、公募なしで就職する、というのが一般的なルートだった。

それが大学院重点化によって進学者が俄然、増える。私が大学院入試を受けた年は東京大学を除くほとんどの大学で英語と第二外国語の試験が必須だったが、翌年以降、第二外国語の試験がなくなり、英語だけで受験できるようになった。その当時から、このまま大学院生が増えると、就職できない者が増えるのでは、という危惧は囁かれていたが、定員を満たさないと何か恐ろしいことが起きるかもしれないという恐怖心から、国公立大学もかつてより多い大学院生を受け入れていた。そして徐々に大学院でも、アメリカ型のコースワークと博士論文の執筆が必須となっていく。ただ、特に博論への道は平坦ではなかった。当時、外国で進学した教員は博士論文を書いていたが、日本で博士課程を修了（単位取得退学）した教員は博士論文を書いていなかった。知られるように明治以降の日本の大学は、ドイツのそれをモデルにしており、博士論文というのは研究と教育の経験を何十年と積み、50代ぐらいで研究人生の集大成として書くものと位置付けられていたからだ。いわゆる「論文博士」である。

このため私たちのように、30代で博士課程修了後三年以内に書く「課程博士」の論文を「博論」に値するものとして認めてもらうのは困難を極めた。しかし博論を書かないと就職できないと言われるようになり、とにかくなんとか形にして出す、ということが要請される。2007年、やっとのことで博論を書き終えた私は、同じくフィールドワークを終えた同世代の人々を集めて地下組織（というのは大袈裟で、互助組織である）「民族誌co-labo 100」を作った（西 2011）。同じ境遇を分かち合う仲間なしで指導教員らとだけ対峙するのはなかなか辛い、ということを実感したためである。メンバーの一人が、「博論って、都市伝説じゃないんですか（笑）」と笑うほど、当時の博論は書き上げるのが不可能なのではないかと感じられた。

内藤さんは幸い、博論を書かずに就職された。しかしその結果、2019年に学科主任をしながら博論を書くという、別の意味で過酷な経験をされた。ある意味、同書は院生時代から20年以上かけて書かれた、20世紀的博士論文をもとに書かれた単著である。それは何者でもない立場から、何事かを成し遂げ、半生を振り返る女性を主人公とした、自己形成や成長を物語る教養小説（Bildungsromanビルドゥングスロマン）のようでもあり一人称民族誌とも読める。

それでは以下に、その内容と特筆すべき点を挙げていきたい。

Ⅱ　支援する側のリアル

一冊の全体像を論じるのが目的ではないので、まず、出版社HPに書かれた宣伝文[4]を紹介する。

貧困者、支援者、弱者、専門家。彼らは何者なのだろう。
「小さき人びと」はどのように世界を見て、生きているのだろう。

政府開発援助の現場における、人類学者のもがきと葛藤の記録。

支援現場において人類学を志す者が、様ざまな文脈を生きなければならないということ、何事にも生身でむきあう文化人類学の知と営為には可能性があるということを、本書では述べたいと思う。いわゆる社会的弱者とそうではない人びとがいるこの世界で、開発支援はどのように実践されるとよいのか、人類がうまく共生するにはどのような道がありうるのか。［本文より］

以上は端的に同書の特徴を掴んでいる。しかし、なおも驚かされるのは、ビビッドすぎるコンフリクトの描写である。

『取るに足らないものたちの民族誌――チリにおける開発支援をめぐる人類学』の章立ては以下のようになっている。

序章
第1章　チリにおける貧困の諸相
第2章　「貧困空間」の人類学
第3章　「貧困空間」の民族誌
第4章　開発現場の人類学／開発現場で人類学
第5章　専門知のリハビリテーションに向けて
おわりに
参考文献

ここでは筆者が最も衝撃を受けた第4章から論を始めたい。続いて5章、そして最後に「貧困の文化」に関して、同書で触れられていない議論を紹介する。

1　学ぶことはほとんどない

内藤さんは文系の大学院生として、チリでODAの医療協力プロジェクトに参画した。日本から技術者を派遣するだけでなく、チリからも研修を受けにくる。しかし4ヶ月間の来日研修の後に、ある理学療法士と整形外科医の二人はこう言ったのだという。

「日本から学ぶことは、ほとんど何もない」

この言葉に対し、国立医療機関総長の怒鳴り声が響いた。「日本こそが高度な技術と知識を持っているのに、途上国のおまえらが何を言うか。呆れるほど傲慢で生意気だ！」（内藤 2023：194-195）。

この二人はチリで行われているリハビリテーション（以下、リハ）の素晴らしさを説いてまわったため、日本各地のリハ施設で不評を買い、受け入れを拒否するところも出てきたという。

日本側からすると、安くはない費用をかけて指導「してあげた」学生の立場にある者が、「先生から学ぶこと、正直なかったです」と言われたに等しい。これに対してここまで正直に本音を晒してしまった総長もすごいが、それを忘れずに書いてやる、と思って書いてしまう内藤さんもすごい。

この「事件」を受けて、チリのプロジェクト本部はチリ人たちに個別指導を行い始める。「日本の先生方に逆らったり口答えしないように」「コメントをする場合は穏やかに」「できれば褒めたたえること」

教えられる側のあるべき態度を事前に「指導」された上で研修を受けるよう、チリ人らに気づかせ、気遣いをさせるようになった、という点で、技術移転というよりも、日本の文化移転には成功したといえるかもしれない。

「日本研修済みのチリ人から後継者へ、実践に役立つ返事として語り継がれた日本語が「はい、先生」だというのも笑えぬ事実だ」（内藤 2023：195）。

冒頭の忖度ない発言をした「暴言研修生」は、日本人医師ら専門家がチリに赴任する際には休暇に出され、院内で患者医療に携わることを禁じられた。すると現地では絶大な人気を誇るベテラン理学療法士だったため、患者離れが数十件起きてしまったという。しかし現場における日本の意見は絶大で、研究生の希望を聞く仕組みはなく、日本側のスキームで進める前提しかない（内藤 2023：195-197）。

そもそも、内藤さんが派遣されたのは、「地域リハ」はできるかどうかの可能性を探るためであった。人類学の基礎的な教育を受けていれば、地域リハが行われる場所の様子を参与観察したり、リハを行う側や、リハを受ける側に話を聞くのが普通である。にもかかわらず、現地の状況をよく知っているはずの理学療法士らに話を聞かない上に、意見をされても聞く耳を持たない。こうした問題点を指摘する内藤さん自身

の声も幾度となく軽視され、否定される。日本：チリ、男性：女性という不平等だけでなく、医療：人類学という学問の間の「権威」の非対称性が繰り返し現れる。

そもそも、先の実習生らが「学ぶことは何もない」と言ったのは、日本のリハが「遅れている」からではない。チリの現実に役立つものではないからだ。日本から最新のものとして教えられるリハビリテーションは、経済的に余裕のある日本だからこそ可能なハイテク機器やそれらによって生存が可能になった患者たちのためのものであったりする。しかしそうした重篤な患者やバリアフリーのあり方は、そもそもチリには「存在し得ない」。こう遠慮がちに書かれているが重篤な患者は、チリではそもそも生き延びることが難しいのだろう。チリの障害児の親の願いは、子供に「とにかく歩いてほしい」というものだ。日本側は、子供が泣いても歩かせるリハを「途上国」の野蛮なやり方とみなして改善しようとしてきたが、彼らには経済的に余裕がなく両親が共働きせざるを得ないため、少なくとも生活のことは自分でできるように自立してもらわなければならない。家の中にあるとは限らないトイレに、自分で行けるようになってくれないと困るのだ（内藤 2023：197-198）。

患者のためのリハビリテーションであるにも関わらず、こうした彼ら自身のニーズは長らく気づかれることがないどころか、聞こうともされてこなかった。なぜなら、日本人医療従事者＞チリ人医療従事者＞患者とその家族、といった順でヒエラルキー化がなされているためだ（内藤 2023：206）。医療者は日本人であってもチリ人であっても、「患者家庭の貧困状況に疎く無知である。こうした幾重もの現実の誤認があるにもかかわらず、進んだ技術の所有者であるという認識や専門知の所有者であるという自負、それに基づくヒエラルキーが、これらの誤認の存在を覆い隠してしまう」（内藤 2023：206-207）。

人類学的調査とそれが生産する知はこうした誤認と構造を明らかにすることによって、プロジェクトと現実の間のギャップを埋めることを可能にしうる。しかし人類学者は、「なんとも歯がゆく拠り所のない感覚を味わわされる」。「技術移転というスキームは、現地の社会・文化的背景との接合という志向性が弱く、しかもその弱さに無自覚だからである」（内藤 2023：207）。

こうした問題に気づくことができたのは、内藤さんが「移転すべき技術」とはみなされない「人間関係の構築やコミュニケーション」に時間と労力を割いてきたからである。「そうした日常を重視するわたしの仕事はにわかに結果や成果が出るものではないゆえに、実務者からはもちろん大半の人びとからみて、ただ遊んでいるようにしか見えないのかもしれない。この思いがどうしようもない責苦になっていたのも事実である」（内藤 2023：204）。

しかしこうした日常のなかで患者の母親とのやりとりから得た気づきから、様々な地域リハ（内藤 2023：175-191）が構想提案され、可能になった。

ヒエラルキーの上位から下位に向かって「技術移転」するのではなく、「協力して

一つのものをつくる」というスキームに転換することが必要なのである（内藤 2023：207）。しかしこの転換の元となる人類学的な知は、情報として伝えればいいわけではない。これを乗り越えるには、ヒエラルキーの下位だけではなく、ヒエラルキーの上位に対しても理解を深め、各専門家をつないでいく必要がある。しかしそれはいうほど容易ではない。次の章は、その現場を「実際の支援現場をフィールドとして、かつ一つのコマとして、また文化人類学という一つの専門文化を扱う当事者としての民族誌」（内藤 2023：208）である。それは同書の冒頭に書かれていたように「泥くさい」だけでなく、合評会の際に内藤さんが同書執筆後、読み返したくなかったとこぼした言葉も理解できる、なかなかにしんどいものである。

2　普通は書けないフィールドの葛藤

5章「専門知のリハビリテーションに向けて」は、専門家こそ、その知のあり方をリハビリした方がいいのでは？という内藤さんからの告発であり、果たし状である。合評会では、もう一人の評者から、「これでもう内藤さんにJICAから仕事行かなくなるだろうな（笑）」という言葉があった。私はそれよりも、フィールドで「お世話になった」と書いて終わるような対象となる人たちについて、良い面も悪い面もあけすけに書いていることの方に驚いた。登場人物の名前について、まず、インフォーマントの名が実名か仮名かを問うと、混在しているという。「貧困地区、患者、こどもについてはすべて仮名で、プロジェクト関係者は一貫していないのが実情です」（10月25日私信より）。また、この章で重要な人物である、マリソルとマルセラという似たような名前が続き、実は同一人物の名前を混同したのかと思ったのだが、マリソルが二人で、マルセラが一人なのだ。

「ソーシャルワーカーのマリソル（敵）、ソーシャルワーカーのマルセラ、看護士のマリソル、です。このあたりは本人承諾済みの実名なのですが仮名にしてややこしさを軽減すべきであったと思っております」。

この返事に対しては、私は、「敵のマリソルさんにも承諾いただいて実名を使われているのでしょうか。この件について書くことも伝えた上で？そうだとすると、聞くに至ったまで関係を修復した内藤さんも相手もすごいですね。」と答えている。

以下、地域リハを始める上で院内の人間関係を中心とした葛藤の話を紹介したい。

内藤さんに求められていたのは、「地域リハが可能かどうかの判断」という任務だった。しかも日本の国際協力ではやったことがなく、日本国内でさえ実施が難しいとされていた[5]。このため、赴任直前に日本国内委員会を訪れてみて、年齢も社会的ステイタスも場違いであり、参加を後悔した。派遣予定の専門家の日程一覧では、他の専門家のスケジュールが細かく埋められているのに対し、出入国日程と関係機関への挨拶以外はほぼ空欄になっていた。

手始めに、病院内で唯一地域と接触するソーシャルワーカー部門のリーダーであ

る、10歳ほど年上のマリソルと仕事を始める。建前上は内藤さんがマリソルに「地域調査法技術」を「移転」することになっていたが、まずはマリソルが院内を連れ回してくれ、病院のシステムを学んだり、各部門の診察とリハに立ち会い、コーヒーブレイクに参加したりした。しかし彼女の仕事はデリケートな問題を扱うことが多く、ずっと行動を共にするわけにもいかないので「院内で放し飼い」になる。仕事から上がる時には、内藤さんがその日の出来事と考えたこと、地域リハの種になりそうなメモ的内容などをマリソルに話すという体制が出来上がっていった（内藤 2023：216）。着任して1ヶ月の間に様々なリハビリ治療に立ち会った。スポーツ大会では患児相手にも本気で戦った。子どもに遊び相手と認識され、家族らとも関係が近くなっていった。

着任して2ヶ月目には、プロジェクトの概要を把握し終え、院内でのチリ人専門スタッフや患児との交流も進み、比較的自由に利用できる車両が供与され、地域に出られる機会が増えそうだった。そこで院内に「地域リハ準備チーム」を立ち上げたいとマリソルに相談したところ、リハ医師、理学療法、作業療法、言語療法、看護師、ソーシャルワーク各部門のリーダーがメンバーとして参加することになり毎週木曜午後2時に定例で集まることになった。しかし、内藤さんから地域リハの方針が発表されると思っていた彼らが、そうでないと知ると、「これからどうするの？」と他人事のように言い、雑談を始めたことが内藤さんにはショックだった。地域リハがプロジェクトの中に入ったのはチリ側の要求だと聞いていたが、現実にはその時点で、内藤さんがやりたがっていて彼らが従う、という構図になっていた。

しばらく同じような人たちと交流を深めていたが、病院には他にも色々な人がいるため、「限られたチリ人に囲われているような状況でもあった」（内藤 2023：222）のに気づき、非専門スタッフや職員たちと話す機会を増やした。

赴任から2ヶ月目に入ると、内藤さんは病院の外のフィールドに出るようになる。もう一人のソーシャルワーカー、マルセラ（内藤 2023：224）の仕事見学である。チリでは地区訪問のことを、（Terreno＝フィールド）と言う。実際に家庭を訪問してみてショックを受ける。

「院内で顔見知りになって退院していった子の家庭で、その子が土むき出しの床に座っているのを見て、ことばを失った」（内藤 2023：224）。

本論の冒頭で述べたように、大学院生時代にすでに、内藤さんは学会や研究会などで、実際に患児の家庭に行って初めて、そこに病院のようにまっすぐな壁や床や家具があるわけではなく、リハが継続できずに再び症状が悪化する事例について語っていた。その時は私もなるほど、と思ったが、写真（内藤 2023：165-166）で患者と住居の様子を見て想像以上の落差に衝撃を受けた。見ず知らずの子供であってもそうなのだから、親しくなり回復を喜んだ患児のこれほどの悪化を目の当たりにしたら心が折れてもおかしくない。こうした中でリハが継続しにくいことがわかり、地域リハの適

切なあり方を構想するため、訪問するだけでなく、家庭でするにはどうしたらいいだろう、と話をしてみるようにした。たまたまマルセラの夫が人類学者で、内藤さんの思考回路と望みを理解してくれ、患児の家族と話す機会を積極的に作ってくれたという。

地区訪問を始めて3ヶ月、内藤さんは患児の家庭の写真を病院内で専門家を集めて行われる臨床検討会でも示す。臨床検討会とは入院患児の治療方針を各部門で話し合う機会である。絶句するスタッフも多かった（内藤 2023：226）。

内藤さんは家庭におけるリハ継続を願った。土の床や窓枠だけの窓、天井や壁が段ボール、ダニだらけのソファといった家庭でのリハ継続が達成しにくい環境の改善に向けて、地域リハ構想をチーム全体で考えたいという議題を提出した。リハは続けなければ患者の症状は再び悪化してしまう。リハを持続可能なものにするために、現場で達成可能な人的・物的資源を用いて最低限のコストで実現し、徐々に地域・患者家族主導の活動にすること、そのためチームには患児家族に身近な准看護師と、地域や家庭で使えるリハ道具めいたものをその場にある資源で作ってくれる技術装具士も入れるように提案した。（内藤 2023：226-7）

しかし、それは予想外の猛反発を受けた。准看護師や技術装具士はプロジェクトに関わる立場にないと言うのだ。チリは階級社会である。後で分かったことだが、チリでは看護師になるのは難しく、准看護師との間には資格取得の上で圧倒的な差があり、一緒に働くことが心情的に理解できない――つまり、「下々の」者が参加することが許せない――とのことだった（内藤 2023：228）。そうしたヒエラルキーを重んじる社会は、内藤さんも絡めとる。

3　飼い犬

先の提案をした会議の後、始めの頃院内を連れ回してくれたマリソルに「どういうつもり？」と問いただされる。自分にあらかじめ話していない内容を会議で話すのはなぜか。内藤さんが出す成果は彼女のものであるはずなのに「飼い犬に手を咬まれるとはこのこと！」

落ち込んだというが、内藤さんがマリソルへの信頼を失いつつあったのも事実だった。

> 確かにある時期から彼女に出来事報告をしなくなっていた。なぜなら、いつも彼女はわたしが思いついたことを、会議でまるで自分の考えのように話していたからだ。チームとしてそれを練り上げていくのであれば一向に構わなかったが、彼女はそれを元手にチームにおける発言力と実権を握る道具にしているように見え、そういう権力思考は地域に根ざした活動を行ううえでは、あまりいい影響がないと判断したからだ（内藤 2023：229、下線引用者）。

地域リハチームの家庭訪問についてもマリソルは自らの領域を侵されまいと車両を占領するなどして阻んだと言う。しかし、最終的に自ら「私は頭が固い」という副看護師長のエルミニアを連れ出すのに成功する。「彼女も良く知る常連の障害児の家庭で、洗っていない犬猫のにおいと腐った牛乳のような酸味のあるにおいがまざった臭気」（内藤 2023：229-230）がする。

> 相当な打撃だったらしく、しばらく彼女から笑顔が消えていた。彼女は、「わたしはまだわかっていなかった」と一言つぶやいたきり、その日はそのまま黙っていた（内藤 2023：230）。

内藤さんは、一律に各部門長を集められた地域リハ準備チームを解散し、新たに面談して実際にやりたいメンバーを選んだ「地域リハチーム」を結成した。その際、地域リハの必要性について全スタッフに説明するため、画像をみただけで患者の暮らしの全てを分かったつもりにならないで欲しいと伝えた。その場でうまく説明できず、口ごもっていると、エルミニアが「画像から、においはわからないのよね、ジュンコ？」（内藤 2023：213）とフォローしてくれた。石頭な彼女の発言は説得力を持っており、理学療法のボス的存在が拍手をしてくれた。人前では絶対泣かないと決めていたにも関わらず、内藤さんの目に涙があふれた。

協力者とのコンフリクトや、協力者間のコンフリクトは、ありそうだが書きにくい。若くても、偉すぎても、敏感すぎても、鈍感すぎても書けない、「そこが知りたかった」部分が同書には描かれている。「支援」の現場が綺麗事では済まないこと、対象となる人々も、一緒に支援する側になる側も一枚岩ではないし、一筋縄ではいかないことが描かれていることは、これから夢を持ってそうした場に入り込もうとする若い人たちにとって、転ばぬ先の杖としての役割を持つかもしれない。少なくとも、これからフィールドに入ろうとする人類学者にとって、あるいはフィールドで悩む誰かにとって、自分だけではないという一縷の望みとなるだろう。

とりわけマリソルの態度と関係は、若く力のない大学院生にとって、トラウマになり研究者の道を閉ざされてもおかしくなかったものである。

> 何度か彼女に正面からそのことを言ったが、聞く耳を持ってもらえず、報復的に公私にわたり散々いじめられた。そうした<u>彼女の行動様式は、開発援助の負の遺産</u>ともいえるかもしれない。<u>つねに成果が求められ</u>、成果をあげれば引き立てられる（内藤 2023：229、下線引用者）。

しんどいフィールド経験である。ただ、この行動様式は、開発援助によるものだけ

だろうか。同書ではほとんど触れられていないが、私には、通底するある政治経済背景が大きな影を落としていると見える。チリが世界で初めて徹底的な実験場となった、新自由主義（ネオリベラリズム）である。

4　新自由主義

新自由主義とは「強力な私的所有権、自由市場、自由貿易を特徴とする制度的枠組みの範囲内で個々人の企業活動の自由とその能力とが無制約に発揮されることによって人類の富と福利が最も増大する、と主張する政治経済的実践の理論である」（ハーヴェイ 2007：10）。その実験場となったのがチリだ。ピノチェトのクーデター後、ミルトン・フリードマンを中心としたシカゴ学派の学者ら「シカゴ・ボーイズ」を経済政策顧問団とした「軍産学メディア複合体」によって、新自由主義が進められる。結果、国の資源が国外の私企業の利益のためとなり、国内の格差が野放しにされていく様子を中川は「経済ジェノサイド」（中川 2013）と名付けた。チリのドキュメンタリー映画の巨匠パトリシオ・グズマンは、その無慈悲な過程を『夢のアンデス』（2019）で美しくも悲しい映像と共に描いている。

『取るに足らないものたちの民族誌』の前半Ⅰ部（1－3章）は、国の言説として「貧困」が悪とみなされており他の階級の人は貧者も努力して行動と環境を変え、自分達のようになるべきだと信じ、行動する様子を描いている。これは世界で最も早く、半世紀以上も前に新自由主義を取り入れた国だという点を鑑みる必要があるように思う。教育、医療や社会保障など、人権と国の根幹をなす部分が民営化され、貧困は自己責任とされる。これは今や世界の常識となっているが、普遍的な考え方ではなかった。第二次世界大戦後は、かつての列強をはじめとする資本主義国でさえ、完全雇用の実現は国の責務だと考えられてきた。しかし社会主義を敵視しつつ、世界恐慌が起きた経験から、「神の手」に任せるのではなく、政府が積極的に介入する「自由」市場という矛盾を内包した「新」自由主義が構想される。新自由主義を構想した経済学者らの長年の活動により、それは社会の「健全な」姿として刷り込まれていった（ハーヴェイ 2007）。貧困が自己責任であることは、成果が個々人のものであるという見方と表裏一体だ。「開発援助の負の遺産」であるマリソルの行動様式、日本の援助側の傲慢さも根は繋がっているのではないだろうか。

同書では、人類学における貧困に関する研究があまり進んでいない、とあるが、貧困という言葉は使われていなくとも、「グローバリゼーション」「新自由主義／ネオリベラリズム」「格差」などというテーマのもとで扱われ、描かれてきた。アフリカ諸国をフィールドとする現在、日本文化人類学会の中堅を担う人類学者の多くは、この概念を相対化する研究報告をしてきたと思う。

「貧困」概念の理論的枠組みへの注視よりも、人類学は具体的にどのような貢

献ができるかという実践に役立とうとする傾向が増すこととなった。「文化を参照すること」が役割として期待され、「貧困」は解消されるべきだという前提事項は不問のままにとどまり、枠組みそのものを相対化することは容易ではなかった（内藤 2023：16-17）。

貧困そのものを対象としている研究もないわけではない。内藤さんも共同研究で一緒だったという森田良成は修士の時から一貫して国内外でこの題材を扱ってきた。2010年に提出された博士論文『貧困を再理解する－インドネシア、西ティモールの廃品回収人の民族誌』（森田 2010）は、以下のようにある。内藤さんの本とかなり重なる問題意識であることを示すため少し長くなるが、引用する。

本論文の目的は、人類学的フィールドワークと民族誌的記述を用いて、貧困を再理解することにある。これまで人類学は、貧困の問題が指摘されるような世界のもっとも近くでもっとも長期に及ぶ調査と研究を行っていながら、貧困を直接論じることがほとんどなかった。それは、人類学による経済の議論が、いわゆる未開の経済の、貧困という言葉が意味をもちうる資本主義の体系とは異質な体系を描くことを主眼とし、近代社会が自明視する経済合理性を相対化することに本領を発揮してきたからだった。しかし、人や物や情報がこれまでにない規模と速度で世界をめぐる時代にあって、異質な未開の経済のすばらしさを発見しそれを賞賛するだけの主張は、凡庸であるか不可能である。また、人類学の議論のあり方としても、ある社会や文化における個別の具体的な生活世界を、その内部で完結し自足したものとして論じるのではなく、より大規模で匿名的な政治経済との関係において理解する必要が高まっている。

（中略）

（蕩尽しつつ、思うようにいかない生活をかこつ）彼らの現在は、貧困の苦難とはまったく無縁の未開世界のものではないが、一定の望ましい水準に到達していないことを示す指標の積み重ねで想像される貧困とも一致しない。それは物の価値や行為の意味が揺らぐ未確定の現在として、民族誌的記述によってとらえる必要がある（森田 2010、下線引用者）。

単著として出版はされていないものの、貧困とは何かについて正面から扱っている人類学の博士論文であり、インターネット上の公開はされていないが、面識のあるため著者に聞けば本文を読むことはできたであろう。博士論文は信頼に足る出典として論文に引用することができる。医療やリハビリに関わらないフィールドのものであっても、同じテーマについて別の角度から、しかし近しい問題意識で扱っている先行研究なのであれば、出版されていなくても参照すれば多くのことを得られたのではない

かと思う。

内藤さんが引用する先行研究は自身より年上の方のものが多いが、年下の著者によるものでも先行研究として目を通しておく方がいいだろうし、全く同じ概念を使っていなくても、関連する研究は最新のものに目配りをしておくべきではないだろうか。先人が切り開いてくれた人類学や民族誌への敬意を払いつつ、後輩や若手による研究に目を通すことによって得られる新たな知見は少なくないはずだ。何より、よるべない立場にいる若手は、まだ多くは言語化されていない課題や違和感を感じ取り、共有できる相手かもしれない。研究者は一人ではないのだ。

ルイスと「貧困の文化」の評価に関しては、共感と疑問を持った。私自身、調査を始める前には、ルイスの著書に感銘を受けたし、ああいう民族誌を描きたいと指導教員の一人に言った。しかし教員は少し間をおいて、独り言のように「あれは民族誌と言えるんですかね・・・」と呟いた。

今となっては、私も同じためらいを感じる。『文化を書く』より遥か前に起きていた、無名の学生たちによるルイスへの批判とやりとりが、留学中、ルイスの指導を受けた黒田悦子氏によって書かれている。

Ⅲ　貧困の文化

1　ルイスの言葉――本と教室

確かにルイスの作品は、「貧困」と言われる人々の生に肉薄している。彼ら自身のものとされる独白や、日々の暮らしの詳細な描写、人間関係の機微などから、「貧困」という言葉で一括りにされてきた人々の人間性の複雑さや一筋縄ではいかないことを読者に気づかせる。

筆者はかつて、フィールドワーク演習の授業の一環として、『貧困の文化－五つの家族』の「マルティネスの家族－メキシコ村落における一日」の一部（ルイス 1985：43-63）を事前に読ませ、10分ほどの背景解説を加えた上で、グループディスカッションをしてもらっていた。同書は人類学がそれまで対象としていた「未開社会」とは異なる社会を扱い、かつ、「社会全体」から「個々」人に着目するアプローチをとっている。作品の舞台は1940年代以降のメキシコ・シティで、近代化に伴う生活の変化と農村から都市への人口流入による急増が背景にある。作品は、家族のある1日をその成員の複数の視点から詳細に描いており、それを5家族、計5日間描いたものとなっている。ルイス自身はその手法をこのように説明している。

> 研究単位として一日を選んだのは、小説家と共通の発想からであったが、人類学者にそれが用いられたことはほとんどなく、ましてや開拓されたことは一度もない。実は、この方法は文学のみならず科学にとっても多くの利点を有し、人類学の

科学的な面と人文学的な面を結合する上で優れた手段である。一般的にいって、一日が家族生活を秩序立てる（ルイス 2010：22）。

これらの家族の描写と小説とに類似する所があるとしても、それはどれも全く偶然の一致である。（...）小説でも、紋切り型の人類学でもない。適当な言葉がないので、私はそれを、文学的リアリズムと対置して、民族誌的リアリズム ethnographic realismと呼ぶことにしよう。ここで取上げた日々の描写は、作り上げたものではなく、現実に起った事実である。登場人物も、創作したタイプではなく、実在の人物である。ある意味では、メキシコ人の生活の記録は、現在の、あるいは将来の比較文化研究に役立つ歴史的文書である（ルイス 2010：22-23）。

しかし、小説との類似は、「全く偶然の一致」なのだろうか。

授業では、面白く引き込まれ、調査や記述に関する問題点を何も感じなかった、という者もいれば、内面の独白に関してどうしてそれがわかるのか、という疑問を持つものもいた。複数の人間が別の場所にいるのに、それぞれの対象をどうやって観察しているのか、という疑問を挙げる者もいた。

同じ疑問を、ルイスを前にしたイリノイ大学の学生たちは、彼にぶつけた。その背景を語った『民博通信』に掲載されたエッセイ「オスカー・ルイスのこと」（黒田 1987）をみていこう。

黒田は1965年9月、イリノイ大学に留学した。ルイスの第一印象は「疲れた顔が気になった」というものだった。彼は二つの授業を受け持っていたが、「貧困の文化」は「最初から波風が立った」。

極めて私的で心理的な資料は、どのようにして採られたものか、という質問が出た。ルイスは極めて細かく、インフォーマントに接近した過程を説明し、ケース・ワーカーに調査を委託する場合のことも紹介した。別の学生が手を挙げて、インフォーマントの心の中や夢にまで調査者が入っていく権利があるのか、と激しく迫った。ルイスは辛抱強く応対したが、結局、「私は、あれらの家族の生活の世話をみている。資料をとってもよい権利があるのだ」といってしまった（黒田 1987：14-15）。

黒田自身、お金で処理してはいけないだろう、と思ったようだが、現地ではさらに問題だった。

アメリカ人の学生にとっては、もっと別の意味で許せない発言であったらしい。一九六五年といえば、全米に公民権運動がみなぎっていた頃だから。とにかく、こ

の質疑応答の直後から、学生が減り、「貧困の文化」のクラスは夕方から先生の自宅で行われるようになった（黒田 1987：15）。

ある意味、その方がルイスにとっては良かったのだろう。ここで彼は本音を話す。

> 自宅でのクラスは授業というより、自由な会話であった。プエルトリコの貧民街やニューヨークのプエルトリコ人の話が頻繁と出てきた。しかし、オスカー・ルイスが一番、熱をこめて語ったのはエミール・ゾラのことだった。彼が目指しているのはゾラ風のリアリズムということであった（黒田 1987：15）。

『サンチェスの子供達』序文ではこう高らかに書いている。

> この本では、生い立ちの話を記録するのにテープレコーダーを用いたため、新しい種類の**社会的リアリズム**の文書が可能になったのである。テープレコーダーの助けで、話下手の、教育もない、字さえ書けない人々は抑圧されることなく自然に自発的に自分のことを語り、自分の観察と経験を物語ることができるようになる（ルイス 1969：viii、下線引用者）

しかし、メキシコで調査を終え、貧しくても「貧困」以上のものがあると感じた黒田は、ルイスの姿勢には批判的だ。

> ルイスは都市の貧民を扱ったから、貧困から逃げることはむつかしかったと思う。だから、ついに彼は「貧困の文化」という概念までつくってしまった。貧困が作り出す生活の特徴を何項目か挙げているが、これが変革されうるという視点は一切ない。また、こんな生活にも楽しみのある面もある、という見方も一切うかがわれない。実際、大都市の貧民を相手に調査していると、希望的観測は吹き飛ぶだろうし、60年代の確固たる中産階級の人の目には、貧民の生活は救いなき生活形態と映ったろう（黒田 1987：17、下線引用者）。

メキシコでフィールドワークを行った黒田は、当時は想像もできなかった変革は起きたし、貧困からの出口はあったと論じてエッセイを終える。ここではルイスのフィールドでもあったプエルトリコで調査をし、ライフヒストリーを描いたシドニー・ミンツを紹介し、「貧困の文化」以外の道を想像してみよう。

2　ミンツのやり方

ルイスの8歳年下のシドニー・ミンツは、ルイスと同じくラテンアメリカ・カリブ

海地域においてどんなに働いても暮らしていくのに十分とは言えない収入しか得られないサトウキビ畑で働く労働者について書いている。黒田は指導教員をルイスからジュリアン・スチュワードにした方が良いと周囲に助言されていたが、ミンツはその後者に学んでいた。スチュワードはより複雑な社会の人類学をするべきだと考え、プエルトリコの大学と提携し、大学院生を島のさまざまな地域に派遣して調査をさせた。ミンツは編著で調査した地区についてまとめ博士論文も書いたが、何かを取りこぼしたような気がしていた。世話になったタソ（Taso）の甥っ子が渡米するのを手伝い、米国で甥と食事をしていると、タソがペンテコステ派に改宗したと聞いて驚く。そこで彼は、タソのライフヒストリーを聞いて一緒に本を作りたい、と聞き取りをする。彼も録音したし、分かりやすく時系列にした一人称の語りがメインとなっている。間に、タソ自身が書こうと試みた彼の自伝的文章もある。貧しいが誇り高いタソとその家族に金品ではなく、家の修理や歯の治療代を出した。甥の渡米の手助けもした。

「何か頼まれたらできることは何でもやるし、彼もしてくれただろう。信頼と互酬性は友情のあかしだった」（Mintz 1960：6）。

こうして彼は、ある一人物だけを中心に（妻の語りも挟み込まれている）ライフストーリーを描いた。働いても報われず、親も子もあっさり亡くなり、コモンだった土地が私有化され、さらに窮状化する生活のなか、それを引き止めようと呼びかける社会主義に魅了され、選挙や政治に参加しながらも、何の変化も起きなかったことへの幻滅と、娘に誘われてペンテコステ派に参加する過程が淡々と語られる。同時に、ところどころでミンツの声も「I」として挟まれる。人間が人間について語ることの限界を明らかにするためだ。

> 実際に何が起きたか、とか、何が起きているかというのを記録しようとすることは、危険なことでもある。歪みのもととなる源はいくらでもあるからだ。結局できるのは、人間の知覚は限定されていると自覚することでしかない。インフォーマントだけでなく、自分自身のも、である（Mintz 1960：1）。

これに対して、ルイスの描く複数の人物像は俯瞰的であり、ドキュメンタリーで揶揄されていうところの「神の視点」を持って書かれているように読める。黒田は以下のように批判する。

> そんな対象をひたすらリアリスティックに描くことにエネルギーを傾けるとしたら、その目的が何なのかが問われるだろう。晩年のルイスは「貧困の文化」をただ描くために描いていたと思う。もしかして、出口なし、の状況だったのではないだろうか（黒田 1987：17-18）。

一方、ミンツは同時代者の生活や内面を描き続けるのではなく、異なる時間と空間に視点を移した。なぜタソをはじめとするカリブ海地域の人々が貧しいのか、その背景を歴史人類学的に読み解いた。『甘さと権力――砂糖が語る現代史』（ミンツ 1988）ではタソが生産に関わっていたサトウキビがそもそもどのように世界史に現れ、貴重品からありきたりで安価な商品になっていったのかを歴史人類学的に明らかにする。だがその研究のきっかけは、あくまでタソの人生について知り、深く関わったからである。また、ミンツ自身はユダヤ系であるが、カリブ諸国で調査研究し、勤務先の大学に初めて創設されたアフリカン・アメリカン専攻の長を務めたこともあり、アフリカ系アメリカ人について歴史人類学的研究も行った。貧しさや困難の中にあっても、意味を見出すことが「人間」の条件であるという確信に貫かれている（ミンツ 2000）。

ルイスが都市の貧困層を人類学の主な対象として道を開いたのは確かであるが、どうしても「貧困が貧困をうむ」という循環から抜け出せない還元論に陥ってしまう。それを乗り越えるため、内藤さんは、貧困から抜け出していくケースも描いたし、「貧困のハビトゥス」という概念でそれが身体化された習慣によるものであり、決定論的ではないことを示す。しかし歴史化したり、別の地域との比較から相対化することも可能であることを視野に入れておくと、今後の研究で生きてくるのではないかと思う。

3　笑い

もう一つ、ミンツや内藤さんにあって、ルイスにないものがある。調査対象者より自分が優れているとは思わないという謙虚さと、彼らが示すユーモアへの理解である。ルイスの著作は写実的でリアルだが、全般的に暗い。複数の人間の視点が示されるが、自分への誇りに対し、他者に対しては不平や不満の吐露であったり、会話は言い争いや上から下への指示、下から上への嘆願であったりという具合である。これは、2章で内藤さんが述べるように、以下のような視点をルイスも共有しているためだろう。

> 「貧困」を外部から見つめる人びとは、自らがたどってきた道筋がほかのすべての国にとってもただ一つのコースなのだと思っており［小田 1997：61-62］、道筋のはじめの方にいる彼らは悲惨で悲痛な面持ちの笑わぬ人びとだとイメージし（原文注2）、それを悪だと考え、その状況にある彼ら自身が「脱出」を望んでいると信じる傾向にある。（内藤 2023：93-94）

原文注2にはこう書かれている。

（略）二〇〇三年度のチリ大学社会学調査実習で低所得者居住区に入った学生二四人のうち二〇名もが、「貧困者なのに笑っていた」という驚きのコメントを残した、驚くべき感想の束がある（内藤 2023：106）。

貧しいからといって自分を恥じたり、暗い気持ちになったりするとは限らない。例えばキューバでは、「私たちは貧しいけど教養があるでしょう？」と誇らしげに語る女性がいたり、「（お金がないから）彼女に花をプレゼントするって言ったらフラれちゃったよ！（笑）」と人前で自虐ネタを大声で愉快そうに満面の笑みで言う人がいたりする。笑いは日々の暮らしの気晴らしになるだけでなく、一言では表せない複雑な状況や自己を表現するための方法でもある（田沼 2014：4章）。にも関わらず、ルイスによる作品にはそうした笑いが感じられない。

しかし内藤さんの会話にはユーモアがある。しかも真顔でおかしなことを言う、という独特の笑いだ。冒頭で述べたように、私に対して「クダまいてた」と言ったり、貧困者の暮らしが大学院生である当時の内藤さんと変わらない、と言ってみたり。こうした自虐も、相手への直球の批判も笑いに変える会話のあり方は、どこかでみたことがある。大学院生活を送った大阪でもあったが、キューバを出て世界各地で暮らす人々を追った拙作（*Cuba Sentimental*, 2010）の撮影のため訪れたチリでのことだ。

もっと対象から深い言葉を聞き出すために、切り込んで質問をしろ、と指導者に言われていた筆者は、現地に暮らすキューバ人の同僚たちと食事中、こう聞いてみた。

「あなたたちにとって、Lはどんな人？」

すると、大柄な男性はカメラに向かってこういった。「カットしてくれ」

もう一人の小柄な男性は俯いてこう言った。「まだ心の準備ができていない」

どちらも真顔だ。

「Lはとてもいい同僚です。ユーモアのセンスは抜群（*espectacular*）だし　僕に腹を立ててないときはね　明るくて特別で前向き　唯一で偉大（大きい）」

ここまできて、笑いながら聞いていたLが口を挟む

「私　大きくないでしょ」

彼女は小柄なのだ。

「確かに（*claro*）」

Lが少しためらっていう。

「こういう質問を目の前でされてるのが恥ずかしい」

すると、それまで控えめに微笑んでいた小柄な男性が、カメラを向いてこう言い始めた。

「まあ実を言うと嫌な子ですよ　エゴイストで」

そしてにやりと笑ってスプーンで食べ物をすくって、Lの方を見ながら言った。

「でも彼女が奢ってくれるって言ったから」
うなづいていた大柄な男性は微笑んで上を向いてふふ、と笑ってからワインを口にした。

終わった後に、なんでエゴイストと言われたの、と聞くと、Lは笑い、身振り手振りを加えながらこう言った。

私がいつもチリ人をそう批判しているから。個人主義的で分かち合うことを知らないって。だから仕事でいつも言うの。「どうしてみんな分かち合わないの。チームで働いているんだから意思の疎通をはからないと」
パウロはそれをからかって「エゴイストだ」って

偶然にも、彼らも保健衛生に関わっており、やはりチームで働いてもらうのに苦労した内藤さんと遠くはない現場にある。優秀で選ばれた者だけが通える士官学校卒業後、大学で薬学を学んだエリートであり、だからこそかえって人を職業で差別してはいけないという理念を内面化してきたLは、チリで専門家と非専門家との格差と社会的距離にショックを受けていた。専門家である彼女は、技術職や清掃員に挨拶していたが、やめるよう同僚に言われたと言う。しかしそこで議論し、戦うのではなく、淡々とそれを続け、笑いを共有することによって、受け入れられていったのだろう。内藤さんの出身がどこかは知らないが、大阪ではないと思われる。にも関わらず、真顔で行うストレートな自虐といじりネタは、きっとチリで「遊んでいるようにしか見えない」関わりを持つうちに体得したものなのだろう。

人類学者のミゲル・ディアス＝バリーガはルイスと「貧困の文化」に関してレラッホ（*relajo*：冗談）と言う観点から興味深い指摘をしている。まず、ルイスが描くメキシコの貧困層の姿がスペイン語で出版された際、メキシコ人から多くの批判を浴び、「FBIのエージェント」とまで言われたが、実は都市の貧困層に関する描写や分析は、メキシコ人哲学者・作家のサムエル・ラモス（Samuel Ramos 1897－1959）のものとかなり似通っているという。その著書『Profile of Man and Culture in Mexico』（1969）でラモスはメキシコ文化を三つの基本的類型に分けている。ブルジョア、都会人、ペラード（*pelado*[6]）と呼ばれる庶民である。そしてペラードに関する文化的特徴は驚くほどルイスと酷似している――攻撃性、性的混乱、全般的な劣等感である（Díaz Barriga 1997：47）。ルイスはオクタビオ・パス（Octavio Paz）を含むメキシコ知識人の仕事を知っていた。1962年の手紙で、ルイスは自分の調査で得た発見とパスによるメキシコ文化の記述が似ていることを記している（Rigdon 1988, 234 qtd. In Díaz Barriga 62）が、パスはラモスの議論に影響を受け拡大して論じているのだ。しかもペラードに対するステレオタイプは当事者によって再生産される。例えば『貧困

の文化』の登場人物マヌエルの語りが例として挙げられる。

> 世界のどこでもだと俺は思うけど、メキシコ人は、「タマのある」やつを称賛する。・・・俺は喧嘩では絶対、降参しないし「もういい」とも言わない。殺されそうになっても。俺は死ぬ時だって微笑みながら逝くさ。それが俺らのいう男らしさ、「マッチョ」（macho）だ（Lewis 1961, 38, qtd. In Díaz Barriga 1997：49；引用者訳）

このステレオタイプは、メキシコに亡命したカタルーニャ人の両親をもつ人類学者ロジャー・バルトラ（Bartra 1992）によれば、メキシコのポピュラーカルチャーに広く浸透している。それは、社会的考察（social thought）と無縁ではない。しかもステレオタイプは、ペラードの間のレラッホでも活用される。

レラッホは、悪ふざけをする側（*relajiento*）が、その犠牲者（*apretado*）に仕掛けることによって成り立つ冗談だ。『レラッホの現象学』（*La Fenomenología del Relajo, 1966*）の著者ホルヘ・ポルティーヤ（Jorge Portilla）は、レラッホは真剣さやスノッブさ、他の支配的な行動規範を宙吊りにする（suspend）「ストリートの文化」を理解する上で不可欠だという。レラッホのユーモアは、悪ふざけをする側とされる側の階級関係に関わっている。バルトラはこうまとめる。

> *relajiento*（レラヒエント）--未来のない人物で、何も真面目に捉えない。Relajientoたちはほとんどの時間、何もせずに過ごすし、そのユーモアといつでも会話に参加しようという姿勢のため、良き同伴者（good company）である。（略）（Bartra 1992：39-41）

> *apretado*（アプレタード）—人々の会話によれば、生真面目な精神を体現する人物である。彼は上流階級でスノッブで、しばしば外国人、主にイギリス人かアメリカ人であると考えられる。*Apretado*たちはユーモアのセンスに欠け、自分達が社会の最も高い価値を体現していると感じている。価値を体現していると考える一方、コミュニティと価値を共有していると考えていないため、彼らは対話することができない（Bartra 1992：87-95）

ディアス＝バリーガは、ルイスのインフォーマントの一人、ギジェルモ・グティエレスの語りは実は、ルイスに対するレラッホであり、ルイスは笑いの標的だったと分析する。自転車販売の事業に失敗したグティエレスは、新たな売春宿の構想をルイスに話す。近代的で大きな建物を建て、ある通りの売春婦全てをそこに集れば、彼女たちが払う賃料は今よりも安く済むようになる。それに彼女たちは裸で寝そべるのではなく、椅子に座り、同じ青い仕事着（スモック）を着る。

「この案を市長に1000か2000ペソで売れれば、また自転車販売に戻れる。それで、俺はまた上っていくだろう。そう思わないかい？」（Lewis 1959：143-144）。

上記の言葉を引用した後、ディアス＝バリーガは「これがレラッホじゃないとしたら、メキシコ人はユーモアのセンスがない！」とし、こう続ける。

> グティエレスのレラッホは進歩や発展の問題に対する批判を寓意的（比喩的）に表したものだ。グティエレスによる画一性の強調・・・売春婦が同じ仕事着を着たり、コンクリートの椅子に座っていると言うことは――近代の理想としての効率性を、レラッホで批判しているのだ（Díaz Barriga 1997：55）。

さらに彼は、グティエレスはレラッホを使うことによって、ルイスと対話しようとしていたのだと論じる。なぜなら英語版ではことごとく削除されているが、元の録音により忠実に再現したスペイン語版では、何かしら話した後、最後に、「そうだろう？」（Don’t you think?）と締めくくられているのだ。先に挙げた売春宿の説明は、こう終わっている。「俺は常に進歩しようと決意している。そうだろう？」

しかし残念ながら、ルイスはこのレラッホが冗談であることに気づいていないようである。なぜなら*apretado*の説明にあったように、自分自身がより高い価値を体現していると信じて疑わないからだ。

> ［サンチェスの子どもたちの］アメリカに対するより優れた（superior）国という肯定的なイメージは、彼らの間での私の地位を疑いなく高めたし、彼らが見慣れていた懲罰的な父親とは対照的な、情け深い権威者（a benevolent authority）として私を位置付けることとなった（Lewis 1961 xx-xxi, qtd. in Diaz Barriga 1997：58；引用者訳）。

痛々しいほど、自分が笑われる立場に置かれうることに気づいていない。これこそ、ヒエラルキーの上部にあることによる弊害かもしれない。

内藤さんはチリにおいて、幸か不幸か、ヒエラルキーの上と下、両方を体現する両義的な存在だった。このためどちらの人とも会話することができ、それぞれのユーモアや笑いを理解できたのだと思う。

コロナが明け、科研が採択された内藤さんは、再び、チリを訪れる機会があるようだ。その時もまた、大変なテーマ[7]を扱われるようだが、精神的にキツい時には、どうか迷わず心理カウンセラーを頼ってほしい。そして、時には、様々で複雑な意味が交錯する笑いを忘れずに。

注

1　現代文化人類学会、2023年度第3回定例研究会、10月30日（月）18：15～於：早稲田大学戸山キャンパス32号館225号室、ハイフレックス方式

2　私はもともと内藤さんの一学年上だが、留学して学部を5年で卒業したので大学院進学は同じ年になった。

3　当時は女性は2年間で卒業する短期大学に進学することが一般的だった。筆者と同年生まれで短大を卒業したある女性はバブル期だったため「いい企業」に就職するのが容易だったと語っていた。

4　春風社既刊目録『取るに足らないものたちの民族誌：チリにおける開発支援をめぐる人類学』http://www.shumpu.com/portfolio/926/

5　この点に関して内藤さんから以下のような解説をいただいた。「日本では2000年に高齢社会にむけた介護保険制度が創設されて、それ以降、地域医療実践が活発になったと認識しています。地域医療構想が制度化されたのは2014年のことなので、当時、海外に出せるノウハウがあるはずもなかったというわけです。」

6　Díaz Barriga 1997：44で*pelado*（lit.short one）＝背が低い、と注釈しているが、原義は「*pelar*＝刈る」の受身形で、「刈り取られた」と言う意味であるため、転じて、「無一文の、貧しい」という意味になったと考えた方が自然であるように思う。

7　基盤研究（C）「チリ軍政下における拷問から生還した女性たちの民族誌的研究」（23K01022）2023-4-1―2027-03-31

参照文献

小田亮 1997「発達段階論という物語：グローバル化の隠蔽とオリエンタリズム」川田順造（編）『岩波講座文化人類学3反開発の思想』岩波書店、pp.61-78.

黒田悦子 1987「オスカー・ルイスのこと」『民博通信』N37：14-18.

田沼幸子 2020「小田亮教授退職記念――小田亮教授の人と業績」『人文学報』516-2：1-21.

――― 2014『革命キューバの民族誌：非常な日常を生きる人びと』人文書院.

内藤順子 2023『取るに足らないものたちの民族誌――チリにおける開発支援をめぐる人類学』春風社.

中山智香子 2013『経済ジェノサイド――フリードマンと世界経済の半世紀』平凡社.

西真如 2011「民族誌co-labo 100の試み――「書き手」と「読者」による親身の討論空間」大阪大学グローバルCOEプログラムコンフリクトの人文学国際研究教育拠点（編）『コンフリクトの人文学』第3号、大阪大学出版会、pp. 267-275.

ハーヴェイ、デヴィッド 2007『新自由主義――その歴史的展開と現在』監訳渡辺治、作品社.

ミンツ、シドニー 2000『＜聞書＞アフリカン・アメリカン文化の誕生――カリブ海域黒人の生きるための闘い」岩波書店.

――― 1988『甘さと権力：砂糖が語る近代史』平凡社.

森田良成 2010『貧困を再理解する：インドネシア、西ティモールの廃品回収人の民族誌』博士論文、大阪大学人間科学研究科.

ルイス、オスカー 2010『貧困の文化――メキシコの＜五つの家族＞』高山智博・染谷臣道・宮本勝訳、筑摩書房.

――― 1969『サンチェスの子どもたち（1）（2）』柴田稔彦・行方昭夫訳、みすず書房.

以下、後ろに＊をつけたものは、Díaz Barriga 1997に引用されている文献である。

Bartra, Roger 1992 The Cage of Melancholy; Identity and Metamophosis in the Mexican National Character, trans. Christopher Hall. New Brunswick: Rutgers University Press. ＊

Díaz Barriga, Miguel 1997 The Culture of Poverty as *Relajo*. Chicano Studies Research Centre. 22：43-66

Lewis, Oscar 1961 The Children of Sanchez. New York: Random House. ＊
――――― 1959 Five Families: Mexican Case Studies in the Culture of Poverty. New York: Basic Books. ＊
Mintz, Sidney 1974（1960）Worker in the Cane: A Puerto Rican Life History. WW Norton ＆ Co Inc.
Portilla, Jorge 1966 *La Fenomenología del Relajo*. Mexico: Fondo de Cultura Económica. ＊
Ramos, Samuel 1969 Profile of Man and Culture in Mexico, trans. Peter G. Earle. Austin: Texas Pan-American Studies. ＊
Rigdon, Susan M. 1988 The Culture Facade: Art, Science, and Politics in the Work of Oscar Lewis. Urbana: University of Illinois Press. ＊